



大正期の戦艦陸奥・青森県史編さん資料

青森県は旧国名を「陸奥国」といい、本県の形を印象深いものとしている内湾、陸奥湾をはじめ、むつ市という自治体名などに現在もその名を留めている。そもそも陸奥国は、現在の福島県以北の太平洋側と青森県全域を含む広大な

地域だったが、明治初年に陸前・陸中・陸奥・岩代・磐城の五ヶ国に分割され、ほぼ現在の青森県の地域だけが新たな陸奥国となったものである。今回は、本県に縁の深い「陸奥」という名を持つ軍艦についてご紹介したい。

その名が与えられたのは、大日本帝国海軍が第一次世界大戦の教訓を取り入れて設計し、「八八艦隊計画」と呼ばれる大規模な海軍整備計画に従って建造していた、長門型戦艦の二番艦であった。

陸奥が建造されていた当時、世界各国は第一次世界

大戦の戦勝国を中心として、互いに競い合うようにして軍備拡張を進めていた。だが、それに伴う経済負担が各国の国家予算を圧迫するに至り、各国はワシントンで軍縮会議を開催することとなった。会議では各国の軍事力の象徴となっていた軍艦、な

末、最終的にアメリカに3隻、イギリスに2隻の同規模の戦艦の保有を認めるとと引換えに陸奥の保有を認めさせたのである。こうした紆余曲折を経て1921（大正10）年に竣工した陸奥は、後に大和と武蔵が完成するまでの間、長門と共に日本で最も有力な戦艦であった。そのために、当時の国民にも海軍の象徴的存在であると認識され、戦前のカルタに「陸奥と長門は日本の誇り」という札が出来るほど親しまれた。だが、陸奥は1943（昭和18）年6月8日、本来の力を発揮する機会がないままに、呉軍港に程近い柱島の沖で第三砲塔の爆発により沈没して失われることとなった。

青森県の名を持つ軍艦

石塚雄士

（県民生活文化課 県史編さんグループ）

かでも最強最大の主力艦である戦艦の保有割合について激論が交わされた。とくに陸奥は、会議開催当時まだ建造中であったことから、会議に参加していた他国から廃棄を迫られることとなったのである。しかし、工事が相当進んでいたことや、姉妹艦長門一隻のみでは戦力としての価値が激減すると考えた日本は、様々な手段を用いた

さて、旧海軍の軍艦の艦内には神社が祀られていたが、陸奥には岩木山神社の分社が祀られ、艦が陸奥湾に入泊した折には乗員が岩木山神社に参拝したという。今回掲げた写真は、陸奥が初めて本県に来航した際の絵葉書であり、大正11年9月19日軍艦陸奥観覧記念というスタンプが捺されている。当日の新聞を見ると、郷土の名を持つ最新最大最強の戦艦の来航を青森県民が熱狂的に歓迎した様子うかがえる。だが、陸奥は1943（昭和18）年6月8日、本来の力を発揮する機会がないままに、呉軍港に程近い柱島の沖で第三砲塔の爆発により沈没して失われることとなった。様々な紆余曲折を経て誕生した、本県の旧称である陸奥という名を持つ戦艦が、結局本来の目的で活躍することがないままに失われたという歴史に、本県の様々な開発の歴史を重ね合わせて複雑な感情を覚える方もいらつしやると思う。だが、「陸奥」は第二次世界大戦前のわずかな平和の時代、確かに「日本の誇り」だったのである。